

2023年4月9日（日）復活大祭主日朝礼拝説教

『死は滅んだ！』井上隆晶牧師

Ⅱテモテ1章9～10節、マタイ福音書28章1～10節

①【人間の常識を覆す～大きな地震と墓石を転がす天使～】

婦人たちが日曜日の朝早く墓に行くと、大きな地震が起こり、天使が天から降ってきて墓石をわきへ転がし、その上に座り、言いました。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。」（マタイ28：5～6）地震とは大地がひっくり返ることです。天使は人間が閉じた墓石を脇へ転がしました。地震が起こったのも、墓の石が転がされたのも、人間の常識を神がひっくり返したしるしでした。人は死んだら終わりだと思っています。弟子たちもそう思っていました。だから遺体を亜麻布で巻き、防腐剤を入れたのです。婦人たちもイエス様の遺体に会いに行ったのです。でも墓には遺体はありませんでした。主は約束されたとおりに復活したからです。主は何度もそれを言うておられたのに、誰も本気でその言葉を信じていませんでした。その後、婦人たちは復活したイエス様に出会いますが、天地がひっくり返るような思いをしたと思います。人間は、必ず死んでしまう命しか知りません。しかし、キリストの命は私たちと同じ命ではありませんでした。彼の命は死を滅ぼす命でした。彼は神だったからです。十字架はそれ自体として勝利ですが、金曜日にはまだその命は隠されていました。しかし日曜日の朝、その命は輝き出し、彼が神であることを明らかにしたのです。この世は、この命を知りませんし、気づいていません。

●病院のチャプレンをしている沼野尚美さんの本の中にこんな話が出て来ます。「死ぬのが怖い、まだ死にたくない、と叫んでいる女性の患者さんがいました。しかし体調は良くなく、旅立ちの日は迫っていました。沼野さんはその人に「私は復活であり命である。私を信じる者は死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も決して死ぬことはない。」（ヨハネ11：25）というイエス様の言葉を伝えてみました。じっと黙って聴いておられ、やがて「いい言葉やな」と言われ、さらにこの言葉を書いてきてほしいといわれ、紙に書いて渡すと、たびたび読んでおられました。彼女はこの言葉の意味について問うようになり、キリスト教の教えについても素直に理解していきました。このイエス様の言葉を信じるようになってから、最後の日々、二度と「死にたくない」とは口にしなくなり、穏やかに過ごすことができました。」

もし、永遠の命が本当にあり、それを手に入れることができるとしたら、この世での苦悩は耐えられるのではないのでしょうか。

②【人間の業が終わった時、神は働かれる】

キリストは金曜日に十字架にかかり、ポーンと日曜日に復活したのではありません。真ん中に土曜日があります。この土曜日にキリストは墓の中で何をされていたのでしょうか。イエス様が処刑された金曜日の夕 6 時からユダヤ教でいう「安息日」が始まります。嵐のような一日が過ぎ去り、イエス様も急いで墓に葬られ、みんな自分の家に帰り休みました。イエス様を殺した祭司長たちも、逃げた弟子たちも皆この日を休みました。まるで時間が止まったような静かな日でした。人間の業が終わった時に、神の業が始まります。人間が眠っている間に、神は救いの業を完成されます。昔の祈祷文はこう祈ります。

●「今日、地獄はうめいて呼びます。私がもし、マリアから生まれた者を受け入れなかったならば、私にとって良かったであろうに。彼は私のもとに来て、私の権能を滅ぼし、青銅の門を破り、私が先に捕らえた様々な魂を、神として復活させたからです。」(安息日の晩課の祈り)

旧約聖書の出エジプト記にこんな言葉があります。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。あなたたちは今日、エジプト人を見ているが、もう二度と、永久に彼らを見ることはない。主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。」(出エジプト 14 : 13~14) エジプト軍が背後に迫った時、モーセがイスラエルの民に言った言葉です。エジプト人という所を「死」と置き換えると「あなたは今日、死を見ているが、もう二度と死を見ることはない。主があなたのために死と戦われる。あなたは静かにしていなさい」となります。十字架はイエス様の祭司としての業を現わしています。私たちの罪の為にご自分の体を献げられ、神と私たちを和解させたからです。しかしここではキリストは王として働かれます。彼は神として死と戦います。神は死を創造しませんでした。死は神の敵です。「最後の敵として死が滅ぼされます」(I コリント 15 : 26) とあるからです。神がみなさんの為に死と戦うのです。キリストは自ら死んで、死の世界に入って行かれ、死を内側から破壊し、死を支配したのです。パウロの言葉を借りるなら、「死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前の棘はどこにあるのか」(I コリント 15 : 55) です。キリストは死の棘を抜いたのです。棘の抜かれた死は、誰も傷つけることができませぬ。死は無力になりました。「いや、死は滅んでいない。未だに死はあるではないか」という人がいるでしょう。確かに死はあります。しかしそれは滅びや罰ではなく、神の配剤によってあえて置いておかれるのです。4 世紀のアンブロシウスは「死は諸悪の埋葬、諸善の復活以外のなにものでもない」といいました。私たちが永遠に罪を犯すことが無いように神は死を置かれ、またそのままでいないように復活を定めたのです。だから死を恐れてはなりません。今日は死が終わったことを祝う日です。正教会では、復活祭の夜、4 世紀のクリュストモスの説教が読まれます。

●誰も貧しかったことを悲しみませんように。なぜなら、すべての人のものである王国が現われたのですから。誰もその過ちに涙を流しませんように。なぜなら、救しが聖い墓から輝き出たのですから。誰も死を恐れませんが。なぜなら、救世主の死が私たちを解き放ったのですから。キリストは死に囲まれましたが、この死を滅ぼしました。彼は地獄に降って、地獄を虜にしました。…おお死よ、お前の刺はどこにあるのか。地獄よ、お前の勝利はどこにあるのか。キリストは復活して、お前は葬られた。キリストは復活して、悪魔は倒れた。キリストは復活して、天使らは喜ぶ。キリストは復活して、生命は凱旋する。キリストは復活して、墓にはもはや死はない。なぜなら、キリストは死より復活して、今眠っている人々の初穂となったからです。

③【喜んで生きよう】

●エリザベート・キューブラー・ロスというアメリカの精神科医がいます。死が迫っている患者を助けるのに専門的知識はいっさい必要ないと彼女は言います。そしてある黒人の掃除婦の話を紹介し、彼女が死にかかっている患者の部屋へ入ってゆくと、必ず何か好ましいことが起るといいます。ある日、キューブラー・ロスはこの女性をつかまえ「あなたはこれらの死にかかっている患者に何をしているの？」と聞くと、貧民街での悲惨な生活で起こったある出来事を話してくれました。彼女は病院の待合室で、三歳になる彼女の子供を膝に抱いて、医師が来るのを何時間も待っていました。しかしその子は待っている間に息が絶えてしまったのです。そして彼女は最後にこう言いました。「ね、先生、死って私にとってはもう見知らぬ他人ではなくなっているんです。死は昔馴染みみたいなもので、私ちつとも怖くありません。私ときどき、死にかかった患者の部屋に行くと、とても怯えた表情をしているんです。私はそばへそっと近寄って行って、触ってやりたいんです。そして『死ぬってそんなに怖いもんじゃあないですよ』と行ってやりたいんです。」キューブラー・ロスは「人を助けるのには、あなた自身が死と、死ぬことに関してどういう感情をもっているかが、はるかに大切な点です。」と言っています。

キリスト教徒の強さは、死を恐れず神の命を信じていることにあります。墓は人生のゴールです。しかしこの墓の向こうで、神の救いが行われると知ったらどうでしょうか。私たちはキリストの復活からそれを知ることが出来るのです。私たちはこの世で救いを見たいと思います。病気、戦争、飢饉、災害のない平和な世界を見たいと思います。しかし今は希望をもって忍耐しましょう。救いはこの世ではなく死んだ後で行われるのです。植物も一粒の種が地に落ちて死に、土に埋葬された後、芽が出て成長します。昆虫もさなぎになって、まるで死んだように動かなくなってから栄光の体になるのです。死んだ後で人は変容、成長するのです！。あなたの中にあるキリストの命がそうさせるのです。すごいなーと思

ます。神の計画や知恵は何と深く、大きいことでしょうか。死んだ後に変われるなんて。希望が出てきませんか。やあ楽しい。

アレキサンドル・シュメーマンはこのように述べます。「そもそも最初からキリスト教は、喜びの告知だった。…この喜びの告知なしに、キリスト教は理解できない。教会がこの世に対して勝利しているのは、まさにこの喜びによる以外の何ものでもない。」教会がこの喜びを失い、その喜びの証人であることをやめた時、教会は力を失うのです。故に死の終わりを喜びましょう。キリストの命に預かったあなたは既に復活が始まっているのです。キリストと一体になり、キリストの命をいただいたことを感謝し、輝いて生きましょう。そして「私たち死なないんです！」(we will not die.)と唱えましょう。